

背景)

今日の箇所は、この預言が語られた当時の複雑な状況がわからないとちょっと理解が難しい箇所なので、まずは当時の状況をみなさんにご説明したいと思います。

時は、まだ北イスラエル王国がアッシリアによって滅ぼされていない時期、イスラエルとイスラエル周辺の国々はアッシリアの脅威にさらされていました。

わかるでしょうか。アッシリアはこのように多くの地域を支配するようになる強国で、イスラエルはその脅威にさらされていたのです。

そこでそのアッシリアに滅ぼされないためには諸国が連合するしかないと考えたアラム王国と北イスラエル王国は、イザヤが預言活動をしていた南ユダ王国のアハズ王にも一緒に連合軍を作ってアッシリアに対抗しようと誘ったのです。

ところが、南ユダ王国のアハズ王は、アラムや北イスラエルにつくよりは、アッシリア帝国に従ったほうが良いと考えたため、連合軍の要請を拒否しました。

するとどうなったかという、南ユダ王国の戦力を手に入れた北イスラエルとアラム連合はアッシリアと戦うより先に、南ユダ王国に戦いをしかけたのです。

これに動揺したのが、南ユダ王国の民衆です。アハズ王が連合を拒否したことにより、2つの国に攻められることになった、南ユダ王国の民衆は、アハズに対して謀反を起こそうと考えました。彼らは遠くにあるアッシリアという脅威より、目の前にある北イスラエル、アラム王国という脅威を恐れたのです。だから、6節には

8:6 「この民は、ゆるやかに流れるシロアハの水を拒み、レツインとレマルヤの子を喜んでいる。

と書かれています。レツインというのがアラムの王で、レマルヤというのが北イスラエルの王様のことです。

南ユダ王国の王様であるアハズは、どんどん周辺諸国を制圧しているアッシリアを恐れ、アッシリアに頼ることを選択し、南ユダ王国の民衆は、身近な脅威である北イスラエル王国のレマルヤと、アラムのレツインを恐れ、謀反を起こしてこの2つの国に従おうとしたのです。

アハズ王と民衆は、恐れている存在、頼りにしようとしている存在はそれぞれ違い

ますが、どちらも万軍の【主】に頼るのではなく、彼らが恐れている存在に従ってなんとかして生き残ろうとしたのです。

そのような状況の中、今日の預言は、北イスラエルとアラムを恐れ、この2つの国に頼って生き延びようとしている民衆に対して語られている預言です。

【主】以外に頼っても無駄である)

神様は、一人のこどもの誕生によって、北イスラエルとアラムに頼っても無駄であることを証明しようとされます。それがイザヤの子ども「マヘル・シャルル・ハシュ・バズ」です。1節を読んでみましょう。

8:1 【主】は私に言われた。「一つの大きな板を取り、その上に普通の文字で、『マヘル・シャルル・ハシュ・バズのため』と書け。

「マヘル・シャルル・ハシュ・バズ」なんて、とても一人の男の子の名前とは思えない名前ですけども、この名前の意味は、『「急げ」、「獲物を」、「奪え」、「早く」』という意味です。民衆は、北イスラエル王国・アラム連合を受け入れて従えば、自分たちは生き残れると思っていましたが、それは無駄であり、彼らを受け入れたとしても、結局はアッシリアによって、北イスラエルとアラムは、あっという間に略奪されてしまうのだ。ということを示しています。

これは間違いのない【主】の預言だということを証明するために、神様はイザヤにこの名前を大きないたに刻むように命じ、さらには当時の祭司ウリヤとゼカリヤを証人にさせ、実際にイザヤの子どもに「マヘル・シャルル・ハシュ・バズ」という名前を付けさせます。そして、この預言の通りに、アラムの首都ダマスコは紀元前732年に滅ぼされ、北イスラエルの首都サマリヤは紀元前722年に滅ぼされてしまいます。

民衆が【主】を拒んだ結果の裁きとインマヌエル)

そして、このイザヤの子ども名前のついた預言を【主】が語られた後、今度はより直接的な民衆に対する預言が語られます。それが6, 7, 8節です。読んでみましょう。

8:6 「この民は、ゆるやかに流れるシロアハの水を拒み、レツインとレマルヤの子を喜んでいる。

8:7 それゆえ、見よ。主は、強く水の豊かなあの大河の水、アッシリアの王とその

すべての栄光を彼らの上にあふれさせる。それはすべての運河にあふれ、すべての^{つつみ}堤を越え、

8:8 ユダに勢いよく流れ込み、あふれみなぎって首にまで達する。その広げた翼は、インマヌエルよ、あなたの地をおおい尽くす。」

南ユダ王国の民衆は、アラムのレツィンと北イスラエルの王レマルヤを喜んでうけいれていました。それは神様にしてみると、自分たちは神の民だといいいながら、神様のことを拒んでいる。そのような状態だったのです。

6節にある「ゆるやかに流れるシロアハの水」というのは、この図のようにエルサレムの町の外にあるギホンの泉からエルサレムに流れていた小川のことで、その水はイエス様が盲人を癒やすためにつかったシロアムの池に流れ込んでいました。このギホンの泉からシロアムの池に流れる川は、高低差が2mぐらいしかなくかわだったので、その流れは人の目には目立たないぐらい緩やかなものとなっていました。

神様の臨在とか、神様の恵みというのは、時にこの「ゆるやかに流れるシロアハの水」のように、流れているかどうかもわからないような人の目にはわかりにくい状態なときがあります。でも、たとえ目立たなかったとしても、このシロアムの池に流れ込む水が、エルサレムの人にはなくてはならないのいのちの水であったように、神様のご臨在と神様のめぐみは私達にとってなくてはならないものなのです。でも、それを拒んで他のものに頼ろうとする時、そのさきにあるものは滅びであり滅亡であることをイザヤ書の預言は私達に教えています。

実際、民衆が頼っていた2つの国はアッシリアによって滅ぼされ、そのアッシリアの脅威は、氾濫した川の水が襲ってくるかのようにエルサレムのすぐそばまで押し寄せることになりました。でも、神様はそのアッシリアの脅威にさらされるユダに対して、「インマヌエルよ。」(8節)と語りかけられます。

みなさん、インマヌエルってどのような意味だったのでしょうか。そう「【主】は共におられる」という意味です。そう、人々の不信仰によってアッシリアの脅威は人々を覆うようになるけども、それでも「【主】はかれらと共におられる」という希望を、裁きの預言の中に神様は入れておられるのです。だから、【主】は言われます9節、10節

8:9 諸国の民よ、打ち砕かれよ。遠く離れたすべての国々よ、耳を傾けよ。腰に帯をして、わななけ。腰に帯をして、わななけ。

8:10 はかりごとをめぐらせ。しかしそれは破られる。事を謀れ。しかしそれは成らない。神が私たちとともにおられるからだ。

アッシリア、北イスラエル、アラム王国、そして、南ユダ王国のアハズ王と民衆たちは、それぞれが色々な計画をし、謀をし、時には謀反を起こそうとしましたが、結局はそれらの計画はやぶられ、成就しなかったのです。

なぜならば、神様が、イザヤたち、【主】を信じる者たちと共におられたからです。

【主】だけを恐れ【主】を聖なる者とせよ。

民衆がアハズ王に謀反を起こそうとしたとき、彼らは、預言者イザヤに対しても、自分たちの味方になってください。という依頼をしたみたいですね。そして、たぶん、その依頼は平和的な依頼ではなくって、脅迫まがいのいらいだったのではないかと思います。だから、神様はイザヤとその弟子たちを励ますために 11 節からのみことばを語られています。長いので 11 節から 16 節を私がお読みします。

8:11 まことに、【主】は強い御手をもって私を捕らえ、この民の道に歩まないよう、私を戒めてこう言われた。

8:12 「あなたがたは、この民が謀反と呼ぶことを何一つ謀反と呼ぶな。この民が恐れるものを恐れてはならない。おびえてはならない。

8:13 万軍の【主】、主を聖なる者とせよ。主こそ、あなたがたの恐れ。主こそ、あなたがたのおののき。

8:14 そうすれば、主が聖所となる。しかし、イスラエルの二つの家にとっては妨げの石、つまずきの岩となり、エルサレムの住民には畏となり、落とし穴となる。

8:15 多くの者がそれにつまずき、倒れて打ち砕かれ、畏にかかって捕らえられる。

8:16 この証しの書を束ねよ。このおしえをわたしの弟子たちのうちで封印せよ。」

人々は、恐れに囚われて、謀反の計画をたて、自分たちに味方しろといってくるけども、そのような人々のことばと、人々が恐れているものを恐れてはいけません。

むしろ、恐れるべきは、万軍の【主】なのだと、【主】ご自身が語られています。

13 節を皆さん一緒に読みましょう。

8:13 万軍の【主】、主を聖なる者とせよ。主こそ、あなたがたの恐れ。主こそ、あなたがたのおののき。

私達が一番に恐るべきお方、おののくべきお方、一番に目を向けるべきお方は【主】なのだ。「主を聖なる者とせよ。」

これが、色々な恐れや不安が有る中で私達が持つべき信仰なのです。

なぜならば、【主】こそ私達がより頼むべき唯一のお方だからです。

先日、ある人からこのような質問をされました。私達の教会のメンバーではなく、他の教会の人なんですけども。「私は自分の教会の人に、瞑想とか、座禅とか、ヨガというのは異教的なものだから、避けた方がいいといわれたんですけども、でも、これらは心に平安を与えてくれるし、リラックスできるし、幸福感を増やしてくれるものなので、そうゆう良いところがあるのだから、積極的にやってもいいのではないのでしょうか。」と言われました。みなさんは、このように言われたらどう応えるのでしょうか。私は、その方には「神様にそれを求めたらだめなんですか？」って応えました。せつかく、【主】イエスキリストに出会って、神の民にされたのに、なんで神様に平安をもとめず、神様にリラックスをもとめず、神様に幸せをもとめないで、異教的なものに頼ろうとするのでしょうか。

でも、こうゆうことってというのは、その人だけに限った話ではなくって、私達もいつの間にかやってしまっていることではないのでしょうか。

聖書では、神様のことを岩と表現することがあります。例えば、詩篇 62 篇 2 節には

62:2 神こそわが岩わが救いわがやぐら。私は決して揺るがされない。

という御言葉があります。岩には、揺るがない砦という意味があります。神様こそ、私達のことを守り支えてくださる砦です。でも、その私達の砦である神様にたよらないとどうなるかということ、14 節の後半

8:14b しかし、イスラエルの二つの家にとっては妨げの石、つまづきの岩となり、エルサレムの住民には畏となり、落とし穴となる。

イスラエルの 2 つの家というのは、北イスラエル王国と南ユダ王国のことです。彼らは、自分たちは神の民だといいいながら、神様に頼ることをしませんでした。その結果、守りの砦であるはずの【主】が、妨げの石、つまづきの岩、畏、落とし穴になってしまったのです。でも、これは神様が望んでおられることではありません。

神様は先程読んだ 13 節で、

8:13 万軍の【主】、主を聖なる者とせよ。主こそ、あなたがたの恐れ。主こそ、あなたがたのおののき。

と言われた後、14 節で「そうすれば、主が聖所となる。」と言われています。

みなさん、聖所というのは、【主】と交わる場所であり、【主】の栄光を仰ぎ見るところです。旧約聖書時代は、会見の天幕や、エルサレム神殿の聖所で、祭司たちが【主】の栄光を仰ぎ、【主】の赦しをうけ、【主】の導きを受けていました。

でも、【主】と交わるために本当に必要なのは、会見の天幕やエルサレム神殿の聖所ではなくって、【主】をおそれることなんです。

私達がどこでも【主】を恐れて歩む時、【主】ご自身が聖所になってくださり、私達を交わり、私達を導いてくださるのです。だから、箴言にはこのようなみことばがあります。

1:7 【主】を恐れることは知識の初め。愚か者は知恵と訓戒を蔑む。

【主】を恐れる時、私達は【主】と交わり、【主】の知識を受け取ることができるのです。これはある意味では私達、信仰者の極意なのです。だから、【主】は言われま
す 16 節

8:16 この証しの書を束ねよ。このおしえをわたしの弟子たちのうちで封印せよ。」

【主】をおそれると、【主】が聖所になってくださる。そうでないと、【主】はつまづきの岩になってしまう。この教えをかきつられたものを束ねて、弟子たちがそれをしっかり持つようにしなさい。とそう言われています。

【主】を恐れた結果)

そして、このみことばをしっかりと持つとどうなるかというと、17-18 節

8:17 私は【主】を待ち望む。ヤコブの家から御顔を隠しておられる方を。私はこの方に望みを置く。

8:18 見よ。私と、【主】が私に下さった子たちは、シオンの山に住む万軍の【主】からのイスラエルでのしるしとなり、また不思議となっている。

北イスラエル王国が滅ぼされ、アッシリアの脅威がユダの首元までせまってくる。そのような状況で、【主】のみを恐れるイザヤは、それでも、【主】を待ち望むと言われています。この時の状況は、神様が御顔を隠しておられるように思える状況だけでも、それでも、この【主】に望みを置くと言っています。

そして、そのように【主】を恐れ、【主】を待ち望み、【主】に望みを置く、イザヤ

とイザヤの弟子たちの姿は、絶望があふれるイスラエルの中で、神の不思議をしるすしるしとなるのだ。というのです。

みなさん、これが、私達が信仰を持ち続ける意味です。

みなさん、これは本当のことなんです。

私は、私の人生の中で、私に対して強く攻撃的な人というのは、いつの時代にも一人二人いました。それで、色々悩んだり苦しんだりしましたけども、

【主】を恐れ、【主】だけにより頼む。そのことに集中していったときに、そんな私をみて時々、質問する人がでてくるのです。

「君はなんで、あんなに攻撃されているのに、平気な顔をしているのか」「なんであんなに意地悪されているのに、何事もなかったかのように祈ったり、聖書読んだりしているのか」という質問です。

その時、わたしはこれみよがしに祈ったり、聖書読んだりとかしていなかったんですけど、見てる人はみてみたいですよ。

そして、「クリスチャンというのはそうゆうもんなのかね。」と言ってくれました。

【主】に祈りつつ歩んでいる姿勢が、【主】により頼むものに平安があるというしるしになっていたのです。

だから、私達は【主】を恐れ、【主】だけに頼っていく。

そして、それによって【主】の栄光をあらわすようになるのです。

みなさん、【主】のみを恐れましょう。不安になること、怖いこと、数えだしたらいっぱいあると思います。でも、その不安になる色々は、すでに神様が知っておられます。私達は、自分が神様のみこころの中を歩めているのか、どうか。そのことだけを恐れ、そのことだけに集中して歩んでいけばいいのです。

結論)

最後に、イエス様のみことばを思い出したいと思います。

マタイの福音書 6章 31-33節

6:31 ですから、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って、心配しなくてよいのです。

6:32 これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです。あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。

6:33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それ

に加えて与えられます。

まず神の国と神の義をもとめる。それはイザヤ書的にいうのならば、【主】のみを恐れ、【主】のみにおののき【主】を聖とするということです。

私達がそのようにして【主】のみをおそれるとき、【主】が聖所となってくださり、私たちの救いの岩になってくださいます。